

平城宮中央区朝堂院の調査（平城第367次）

平城第367次調査は、中央区朝堂院の朝庭部分の解明を目的として1月から実施しています。現在復原が進んでいる第一次大極殿の南側に調査区を設定しています。掘る手を休めて目を上げると北には復原が進む大極殿、南には朱雀門が目に飛び込んできます。

中央区朝堂院は第一次大極殿の南に広がる平城宮の中心的な施設のひとつで、元日朝賀、即位式など国の重要な儀式の際に官人達の空間として、大極殿院と一体となって用いられました。

堀で囲まれた長方形の朝堂院の区画には、朝堂と呼ばれる南北に長い建物が東西対称に建ち並んでいます。建物の間は官人達が列立する広場で、ここを朝庭と呼びます。東側の朝堂部分については、既に調査が進んでいますが、朝庭部分の調査は未着手でした。そこで今回の調査では、その実態を明らかにすることを目的としています。

調査区は東西84m、南北24mの東西に長い方形で、面積は2016m²です。

本調査のもうひとつの目玉として、下ツ道の確認があげられます。

下ツ道は、大和盆地を南北にほぼ直線に通る道路で、7世紀にはその存在が確認できます。平城京のメインストリートである朱雀大路は、この下ツ道を拡幅する形で造営されました。このことから平城京造営の基準ということができます。

朱雀門の基壇の下からは、平城遷都に伴って埋



調査区から朱雀門を望む

め戻された下ツ道の道路側溝が発掘調査によって発見されています。溝の中からは、木簡や墨書き器等、多量の遺物が出土しており、遷都直前のこの地域の歴史を考える上で重要な資料の一つになっています。

これらの課題に応えるべく、地中レーダーによる探査や、過去の下ツ道の調査成果を参照しながら、調査を開始しました。

2月17日現在の状況としては、小石を敷き詰めた面を確認しながら発掘を進めています。この面は奈良時代と考えることができ、朝庭は石が敷き詰められた状態であったのでしょうか。

今は、広い範囲が石で覆われた状態で、その下に存在する遺構の有無を確認することは難しい状況ですが、石が少ないところや、後世の耕作などで石敷が破壊されている部分では、遺構が見え隠れしています。このことを考えると、朝庭は常に広場の状態で使用されていたわけではなく、臨時の儀式等の際には、建物を建てる等の多様な利用方法がとられていた可能性があります。今後、石敷の下へと調査を進めていくことで、利用の実態が明らかになるかもしれません。下ツ道については調査区に設けた排水溝の検討から、想定される位置に溝が存在することが確認できました。もちろんこの溝が下ツ道にあたるのか、という問題は更に慎重な検討が必要です。

本格的な溝の調査は、奈良時代の遺構の調査後におこないます。従って現状では残念ながら検討可能な遺物等の出土はありませんが、調査の進展により更に新しい知見が得られることを期待しています。

また、堅穴住居と考えられる遺構も確認されており、平城宮以前のこの地区の状況を考える情報が得られるのではないかと期待しています。

寒さと風に悩まされ、雪の降る中の作業となったり、一日中凍りついた土が融けない日があるなど、厳しい気候の中での作業ですが、平城宮の中枢の一角を明らかにすることを目的に地道に調査を続けていきたいと考えています。

（平城宮跡発掘調査部 金田 明大）